様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５２３

研究課題名（和文）ロシア語の動詞語形成の包括的記述―複合概念の形成と言語的世界像

研究課題名（英文）Comprehensive description of Russian verbal word-formation (in view of forming a complex idea of an action and language worldview

研究代表者
金子　百合子（KANEKO, Yuriko）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：８０５２７１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：時間内で推移する動的事象の解釈および記述の際にロシア語にとって本質的に重要と考えられる意味的優勢素「限界」の、言語を貫くその体系性を、異なる意味的優勢素「安定」を持つ日本語と対照させながら検証した。強い限界がパーフェクティブとして文法化され優位に振舞うロシア語では、限定継続態を使用し弱い限界を示す。良い例が規範的体ペアを形成する完了体ｒｅｓｈｉｔｅ「解決する」の代用として使用される限定継続態ｐｏｒｅｓｈａｔｅで、これは「とりあえずの解決」といった含みをもつ。逆に弱い限界がパーフェクティブとして文法化されている日本語では、「勝ち切る」のように結果動詞にさえ語形成手段を用い強い限界を示す工夫をする。

研究成果の学術的意義や社会的意義
（１）アスペクト・動詞語形成研究への貢献―アスペクト研究はスラヴ諸語や英語を基盤として理論形成がなされてきた。本研究ではロシア語と日本語を対象に文法アスペクトと動的事象の複合概念の語形成との関連性を明らかにした。（２）言語的世界像研究への貢献―言語的世界像の研究は語彙や成語が中心になることが多い。本研究では動詞語形成を言語的世界像の新たな対象として検討した。（３）ロシア語と日本語の対照言語研究の促進・ロシア語教育への貢献―ロシア語と日本語の対照研究の数は非常に少ない。本研究は露日対照研究の流れを作るものであり、また、対訳コーパスを用いた実証的アプローチは対照テクスト言語学の発展にも寄与する。

研究成果の概要（英文）：Our hypothesis is that the notion of “limit” serves as the semantic dominant in Russian aspectual system, while it is the notion of “stability” that is predominant in the one of Japanese. As to the semantics of the perfective aspect (hereinafter called as PF) in particular, the completive PF (“strong” limit) predominates in Russian, whereas in Japanese the delimitative PF (“weak” limit) is more typical. Along with the different prominence of PF semantics in the languages in question, it is worth noting that not the prominent one, but the less typical type of PF seems to bring about a special pragmatic effect and lends various modal shades of meaning to the action of the verb by exploiting derivational or compounding resources and expanding the wordformational potential of verbs. Such are the cases of the Japanese compound verb kachi-kiru ‘win’-completive and the Russian delimitative ｐｏｒｅｓｈａｔｅ instead of the canonical PF ｒｅｓｈｉｔｅ ‘solve’.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア語　日本語　アスペクト　語形成　対照言語学

１．研究開始当初の背景

当研究の学術的背景は以下の通りである。

（１）言語的世界像の研究について—言語の人間中心主義的解釈を唱えたフンボルトの言語哲学「言語的世界像」は、ポテブニャ（『思想と言語』1913）を通し古くからスラヴ言語学に浸透していたが、80 年代以降の認知言語学、コーパス言語学、意味分析手法の発展と結びつき、現在もスラヴ圏の研究者の間で研究が活発に行われている。言語的世界像は、その言語が表現を得意とする意味・概念分野である「基盤的観念」（ヴィエジビツカ）／「意味的優勢素」（パドチェヴァ）に特徴的に現れ、それは当該の言語全体を貫く体系性を持つ。言語的世界像の研究対象は「言語のあらゆる実現形態」である（アプレシャン）。語彙や成語が対象になることが多いが、ロシア語では「不定性」の意味概念がその多様な言語レベルにおいて綿密に構成されるという指摘（パドチェヴァ他）がある。また、ペトルーヒナは、西スラヴ諸語と対照させた際の、ロシア語における「限界」の意味概念の相対的優位性を明らかにし、それをロシア語のアスペクト体系における意味的優勢素と捉えた。それに対し、報告者は日本語の優勢的視座は動的事象の非限界的な側面＝安定的側面（状態・過程）にあると考え、日本語の意味的優勢素「安定」を作業仮説として立て研究してきた。

（２）ロシア語と日本語のアスペクト対照言語研究について—対照言語学的、類型論的アスペクト研究では、動的事象に対するアスペクト的意味特徴の一義的解釈を前提に、言語間のアスペクト的表現の差異を論じたものが多い（『アスペクトセミナー論集』1997~2004）。一方で、アスペクトの理論的枠組みや動詞分類、指標となる意味特徴がスラヴ諸語や英語等の西欧諸言語の影響を受けていると批判される。例えばモーレラトスは英語に特徴的な人間主体性のコンテキストにおけるヴェンドラーの動詞分類は、主題としてよりニュートラルな存在論的三分法に比べ論理的に偏っていると述べている。また、日本語についても、ロシア語の完了体・不完了体の議論を援用して、日本語のル形とテイル形を文法的二項対立として捉える記述のし方には問題があることを報告者も指摘してきた。昨今、非印欧諸語のアスペクト研究が進むにつれ、同じ言語外現実を描写するからといって各言語で用いられる意味特徴が等しく解釈されているとは限らないことが指摘されている。加えて、ある言語表現が可能かという議論は、当該言語が“好む”表現様式の特徴、すなわち個別言語における特定の言語表現の重みづけを測ることはできない。表現様式の傾向として、印欧諸語が人間本位で日本語は自然本位だという指摘（佐久間鼎）、英語の「スル」と日本語の「ナル」、英語の「事象の客観的解釈」に対して日本語の「主観的解釈」（池上嘉彦）といった議論があり、動的事象の推移を問題にするアスペクト研究の中で言語的世界像—言語が指向する世界の見方—を論じることが可能になっている。

（３）上述の背景のもと、報告者は本研究前より、これまで一貫して日本語を背景に観察される、ロシア語の動的事象の推移の解釈と記述にみられる「限界」への指向性を検証してきた。H.21-22 年度科研費「ロシア語の動的事象の推移の記述にみられる言語的世界像」では、主にロシア語のアスペクト的動詞分類における終了限界性の重要性、動作様態における「限界」の豊かな意味的・形式的差異化、ロシア語と日本語の動詞語彙における限界性解釈の差異を論じた。続く H.23-24 年度科研費「意味的優勢素とその言語相対的処理をめぐる日露対照研究」では、対訳コーパスを構築し、語りのテクストにおいても、動的事象の複合的状況が「連続する個別出来事の動態的推移」として記述されるロシア語と「安定的状況の静態的存在」として記述される日本語との対立を示した。本研究はこれらの研究の延長線上にある。クブリャコヴァは現象のカテゴリー化と細分化の積極的な手段となる語形成カテゴリーは言語的世界像における重要な座標であると位置づけた（「言語的世界像の形成における語形成の役割」1988）。既に検討した動作様態はアスペクト的に有意味な観点からの分類であり、したがって、アスペクト研究における動詞語形成は主に動作様態を問題にする。だが、動作様態はあくまでも動詞語形成全体の一部でしかない。動的事象が複合概念として強く結びつき、それが新たな語彙（合成動詞）として実現する動詞語形成分野では、複合概念の結びつき方にも、言語相対的な特徴が認められるのではないだろうか。そしてそこにロシア語の意味的優勢素「限界」はどのように反映されているのであろうか。この問いが本研究の契機であった。

２．研究の目的

研究の準備段階として、ロシア語と日本語のアスペクトの機能意味体系より作業仮説的に各言語の意味的優勢素—ロシア語の「限界」と日本語の「安定」—を取り出した。本研究の目的は、この、時間内で推移する動的事象の解釈および記述の際にロシア語にとって本質的に重要と考えられる意味的優勢素「限界」の、言語を貫くその体系性を、異なる意味的優勢素「安定」を持つ日本語と対照させながら、検証することにある。言語の体系性を前提とすれば、意味的優勢素の有意性はロシア語の多様な言語レベル（形態法、統語法、語彙、語形成、語用など）で観察されなければならない。本研究ではその言語レベルを動詞語形成分野に限定し、ロシア語の動詞語形成の包括的記述と、そこに見られる意味的優勢素「限界」の有意性を検証することを目的とした。

具体的な達成目標として、（１）ロシア語の動詞語形成体系の包括的記述を試みること、（２）ロシア語と日本語の動詞語形成における意味的拡張を比較し、意味的優勢素の観点から、両言

語の複合概念形成の相似点と相違点を考察すること、（３）対訳コーパスを用いて合成動詞の運用実態を調査し、その特徴を明らかにすること、の三つを掲げた。

３．研究の方法

本研究では、各言語の意味的優勢素の有意性を異なる言語レベルで検証し、そして検証する言語レベルの範囲を拡大していきながら、意味的優勢素の言語を貫く体系性を検証する。そのために、まず、（１）ある一つの対象となる分野（言語レベル）の記述を一般言語学的および各個別言語において整理し全体像を把握する。具体的には、アスペクトの文法形態や文法意味、動詞のアスペクト的語彙分類、動詞語形成的特徴、構文的特徴などである。（２）具体的な言語表現を取り上げ、ロシア語と日本語における表現のし方、語形成過程における意味的拡張のし方を言語学的手法により分析する。（３）ロシア語と日本語の対訳パラレルコーパスを用い、言語運用の実態を記述し、当該表現の言語相対的特徴を分析し明らかにする。とりわけ、文学作品とその翻訳によるパラレルコーパスの充実は本研究において重要な部分となる。文学作品の場合、文脈が具体的であり、したがって、翻訳も場面の伝達内容を基軸としつつ、その一方で目標言語における自然さを求めるという意味において、起点言語と目標言語の間の意味的、構造的な特徴が自然に近い形で現われるからである。同時に、翻訳者個人の特徴や作家・作品の特徴もあることから、できるだけ多様なデータを収集することがデータの客観性を高めることにつながる。（４）検討の結果、ロシア語と日本語における動的事象の複合概念の意味的拡張の相違点について、その解釈を意味的優勢素の観点から理論的に説明づけ、それらの現象の個別言語内における体系的な位置づけを試みる。

４．研究成果

（１）国際セミナー「現代スラヴ・アスペクト研究の動向」の開催

動詞語形成はアスペクト、アスペクチュアリティの文法・語彙意味分野と密接に、複雑に交わっている。2015 年度はアスペクト研究に多様な視点からアプローチする世界的研究者をロシアと西ヨーロッパから招き「世界の言語とアスペクト」（類型学的視点）、「動詞の語彙的アスペクト」（アスペクト意味素性と動詞分類）、「スラヴ語の体／アスペクト」（スラヴ語・ロシア語アスペクトの特徴）という三部構成による国際セミナー「現代スラヴ・アスペクト研究の動向」を企画、開催した（11 月 16 日、神戸市外国語大学）。これらの講義についての報告集を神戸市外国語大学『研究年報』（vol.55, 2016）としてまとめた。

（２）強い限界と弱い限界

アスペクト的意味特徴としての限界性ならびにその顕在化を表す語形態はパーフェクティブ Perfective（以下 PF）と呼ばれ，その特徴を持たないインパーフェクティブ Imperfective（以下 IPF）と対立する。このアスペクトの意味的な二項対立が，同時に動詞の形態的二項対立となり文法的に体系づけられているのがロシア語他スラヴ諸語である。他の言語においても当該言語の PF と見なされる形態があり、それは英語の単純過去形や日本語のル（タ）形である。だが、各言語で等しく PF と呼ばれていても、ロシア語と日本語ではその性格が大きく異なる。ロシア語の場合は内的限界の到達が見込まれる動作が文法的体ペアの形成の中心であり、完了体（ロシア語の PF）の典型である。一方、日本語の場合は動作の時間的な境界づけがル（タ）形の PF で提示される。前者と後者の差異、すなわち PF の意味領域に属する限界の概念は、「完成相」（＜点状相）：「限定相」（プルンギャン）、「完成相」：「PF 相」（バイビー他）、「“強い”完成相」：「弱い完成相」（クニャゼフ）と区別されてきた。前者の限界が動作そのものの性質からくる絶対的な“自己完結型”であるのに対し、後者の場合はあくまでも動作の存在に焦点があり、その時間的区切り（すなわち、限界づけ）の動機は明瞭ではない。その意味で、前者と後者に対して、「“強い”限界」と「“弱い”限界」というレッテルを与えることは可能であろう。類型論的には、各言語の PF 性において，ロマンス・ゲルマン諸語よりも、スラヴ諸語（特に東スラヴ諸語）において PF の「強い限界」が優勢的に振舞うことが指摘されてきた。また、日本語については、英語との比較において、日本語は限界性の意味づけが相対的に希薄であることが指摘されてきた（池上嘉彦、影山太郎他）。図で表わすと以下の様になる。

図１

限界の有意性〈弱〉 ---------- 限界の有意性〈強〉
日本語 ＜ 英語 ＜ ロシア語

ロシア語において優勢に働く「強い限界」は、日本語の「弱い限界」を背景にした時、どのような形で顕在化するのであろうか。明らかになった多様な言表事実を以下に挙げる。

（３）動的事象の複合概念の意味的拡張と語形成の潜在性

もっとも、ロシア語の「強い限界」と日本語の「弱い限界」を相対的に対立させることが出来るとはいえ、各対象言語内ではそれぞれの限界の概念化が自然な形で文法化された PF に取

り込まれており、当該の言語話者に意識されにくい。だが、当該言語において劣勢な方の限界概念を表わそうとすると、各対象言語において語彙的、語形成的な工夫が共通して見られる。

① 語形成の潜在性について。例えば、ロシア語の победить [PF] > побеждать [IPF] と日本語の「勝つ」は、両者とも結果を名づける動詞であり、それに至る過程を表わさない。この場合、ロシア語の PF は語彙意味としても文法意味としても明らかな結果状態をニュートラルに表わすであるが、日本語の場合は、このような場合にも動作完遂の意味を持つ補助動詞を加え「勝ち切る」のような複合動詞が生成される。一方、ロシア語でもこのような過程を持たない結果動詞に対し、過程を表わす出来合いの語形成型（-(e)ние）を援用し過程の意味づけを持ち込むような臨時語が作られる場合がある。例えば、*побеждание < побеждать, cf. победа（トルストイ）*едение < есть, cf. еда（マヤコフスキー）。他にも、ロシア語において典型的な体ペアを作る動詞は、内的限界を指向する IPF と内的限界の到達を意味する PF からなるが、この完成相による「強い限界」を避け、限定継続態を用いることで、過程（活動）の性質に焦点を当てる限定相「弱い限界」を作ることがある。例えば、体ペアを作る решить [PF]'解決する'の変わりに限定継続態の порешать[IPF]を用いると、形だけの、とりあえずの、お役所主義的な問題の解決のし方、といったニュアンスが付随する。弱い限界を持つ日本語で強い限界を表わすときの「勝ち切る」にしても、強い限界を持つロシア語で弱い限界を表わす際の порешать にしても、当該言語で優勢ではない方の限界を表わそうとすると、主観的、評価的なニュアンスが強くなるようである。また、各言語の意味的優勢素の性格と語形成の意味拡張の方向性との間に関連性が見られる。

② 結果と帰結について。フォン・ウリクトは，動作によって引き起こされ，それと論理的に結びつき内有的な関係にある第一の変化を「結果」と呼び，第一の変化が引き起こす第二の変化を「帰結」と名づけ、動作と帰結は外有的で因果的な関係にあるとして，両者を明確に区別した。内的限界への到達はウリクトの「結果」に相当し，それはロシア語で文法的体ペアを作る PF によって現実化するが，日本語の PF では顕在化しにくい。例えば、以下の抜粋である。(a)「焼いてください」（男の発話）(b)「焼く？」相棒はぽかんとして相手の眼を見つめた。「その名刺を，今すぐ，(c) 焼き捨てて下さい」と男は言葉を切るようにして言った。(『羊をめぐる冒険』)。この中の（a）（b）の「焼く」と（c）の「焼き捨てる」は、英語訳では全てが burn で、ロシア語訳でも文法的体ペアを形成する сжечь [PF]で訳出されており、両翻訳で念頭に置かれているのは焼いた結果として生じる焼却である。だが、日本語の「焼く」という動詞の語彙意味には、過程とそれによって引き起こされる結果の両方の解釈の可能性があり，さらにこの動詞をはじめとした一連の行為を表わす日本語の動詞には過程の解釈が結果の解釈よりも優勢的に振舞うことが知られている（池上嘉彦）。したがって、語彙的にも，文法的にも，限界の意味づけが相対的に弱い日本語では，その意味を確実に表そうとすると，単純動詞そのままでは不十分で，この足りない意味素を言語化し明示的に表現することになる。文例の(c)「焼き捨てる」は「捨てる」を付加することによって名刺の処分の意味を聞き手に伝える。だが，これはロシア語の *сжечь*（や英語の burn）が実現する内的な限界到達としての結果ではなく、それを前提とした帰結に他ならない。換言すれば，日本語では動作の帰結を示すことによって，動作の限界到達が間接的に強調されていると言える。

③ 語彙反復について。語彙反復はテクスト構造において表現力を高める文体的手法のひとつである。語彙不足による発話上の“欠陥”とみなされる反復を意識的に使うことで，反復する語には論理的アクセントが置かれ、意味が強調される。反復する語の語彙意味が強調されるのは当然であるが、さらにロシア語では、IPF の反復が動作の持続性を強調するのに対して、PF の反復では，動作の限界到達の文法意味がアクチュアルな意味として取り上げられる。対訳コーパスでロシア語テクストの日本語訳を観察すると，完了体動詞の語彙反復が起こる際，日本語訳で「ル形」と現限界到達を明示化する「テシマウ形」が共起する現象が観察される。例）Да, погиб, погиб... Но мы то ведь живы! (Булгаков, «Мастер и Маргарита»)／そう，死んだ，死んでしまった……しかし，われわれは生きているのだ；– Ну если и Борька на этом гробанется – сожгу бумаги. Сожгу – и все, к чертям такое научное наследие! (Савченко, «Тупик – Философский детектив в четырех трупах»)／これでボリカも死んでしまうようなら，メモは焼こう。焼いてしまうんだ，何もかも，こんな科学遺産などくそくらえだ！」。訳者は異なる表現間の差異を翻訳に反映させようと神経を使うのが常であるが，この場合，同一語に対して訳し分ける心理は興味深い。このような現象も対照言語間における限界の有意性の差異を克服するストラテジーのひとつと考えられる。

④ 動詞文と名詞文（アスペクトの緩急とモダリティの濃淡）

上述の研究は主に文中に用いられる陳述動詞の対象言語間に見られる語彙的、語形成的特徴に焦点を当てていた。そこで見られた言語相対的な傾向がテクスト構造でも見られるかを検証した。具体的には、語りのテクスト全体を対象にし、展開する動的事象の表現上の工夫について、露日対訳コーパスを用いて考察、その特徴を分析した。分析対象はチェーホフの『可愛い女』と異なる翻訳者による和訳 10 点である。

ロシア語では、動詞のアスペクト形態 PF-IPF を使い分けることで、事態の展開の緩急を表わし、物語の起伏に富むコントラストを生み出すという手法が取られることが知られている。諸状況の継起性を担う PF は物語りを前進させていく。だが、対訳パラレルコーパスを検討すると、ロシア語原文で用いられている動詞文が和訳では名詞文へと表現構造を変換するという現象が頻繁に起こる。言い換えれば、ロシア語では動詞を中心にした「事象叙述」（益岡隆志）で進むのに対し、日本語では名詞文を中心とした「属性叙述」（同）で進む傾向にあるということだ。その際、日本語の名詞文には多様な性格のものが含まれるが、特によく用いられる「ノダ文」に限定して分析した。その結果、ロシア語原文中の言い切り文のおよそ半分がいずれかの翻訳でノダ文を用いて訳出されているが、その一方でノダ文の使用箇所は 10 人の翻訳者で一致することが極めて少ない。日本語の場合、ノダ文になることで、動的事象が静態的な存在事実に性格を変え、語り手の主観的フィルターを通し場面に関連性の濃淡をつける。だが、日本語においてノダ文の登場による表現上のコントラストが現れる場面と、ロシア語動詞文の PF-IPF のコントラストが現れる場面とは一致しない。このことは、文学作品の実質的内容の伝達を一方に、表現手段としての各言語の形式的特徴をもう一方に、極めて興味深い、内容と形式のせめぎ合いが起こっていると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2　件）

（１）金子百合子「アスペクトの緩急とモダリティの濃淡—ノダ文をめぐる日露対照研究—」『神戸外大論叢』、69(1)、査読有、2018、123-149 頁.

（２）金子百合子「ロシア語と日本語における“強い”限界と“弱い”限界の表し方」『ロシア語ロシア文学研究』、50、査読有、2018、59-84 頁.

〔学会発表〕（計 9 件）

（１）Канэко Юрико. «Трансформация моделей предложения при переводе повествования с русского языка на японский». XII-ый международный симпозиум "Русистика в современном мире". 2018 年.

（２）金子 百合子「ロシア語と日本語における「動作の限界」の語彙（語形成）的表現・文法的表現」第 67 回日本ロシア文学会研究発表会, 2017 年.

（３）Канэко Юрико. «Особенности передачи значения достижения предела действия при переводе с русского языка на японский». Международная Конференция «Русская грамматика: описание, преподавание, тестирование». 2017 年.

（４）Канэко Юрико. «Преобразование типов предикатов при переводе художественного текста (на материале русского и японского языков)» VIII Апрельская международная научная конференция: «Русский язык в многоязычном мире». 2017 年.

（５）Канэко Юрико. «Словообразовательный потенциал выражения аспектуальных значений в русском и японском языках». Международный научный симпозиум: Славянские языки и культуры в современном мире. 2016 年.

〔図書〕（計　3 件）

（１）　ユーリー･S･マスロフ著、林田理恵・金子百合子訳『アスペクト論』ひつじ書房、2018. 432 頁（担当：149-230 頁, 270-382 頁）

（２）　Е.В. Петрухина, Ю. Канэко. Роль грамматики и аспектуальных классов глаголов в репрезентации событий в русском и японском языках // В. И. Заботкина (отв. ред.) Репрезентация событий: интегрированный подход с позиций когнитивных наук. Москва: Языки славянской культуры、 2017.　360 страниц. http://www.gnosisbooks.ru/catalog/yask/16124/

（３）　金子百合子（編）『現代スラヴ・アスペクト研究の動向』神戸市外国語大学研究年報、vol.55、神戸市外国語大学外国学研究所、2016. 神戸市外国語大学学術情報リポジトリ https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=508&pn=1&count=50&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=17

〔その他〕

国際研究集会の開催

（１）国際セミナー「現代スラヴ・アスペクト研究の動向（Current Issues in Modern Slavic Aspectology）」（神戸市外国語大学）2015 年 11 月 16 日
http://www.kobe-cufs.ac.jp/news/2015/17834.html

６．研究組織

(１)研究協力者

研究協力者氏名：ペトルーヒナ、エレーナ

ローマ字氏名：PETRUKHINA, Elena V.